現代日本人における尊敬関連感情の空間的布置

教育心理学コース　　武　藤　世　良

The Dimensional Space of Respect-Related Emotions in Modern Japanese People

Sera MUTO

What is the cognitive structure of emotions related to *sonkei* (a feeling of respect)? This study examined the reproducibility of the dimensional space of respect-related emotion words in modern Japanese people. The data (n=515) of previously published work, in which participants, ages 20–79, rated the semantic similarity of 153 pairs of 18 respect-related words was used for non-metric multidimensional scaling (MDS). The result revealed three dimensions of respect-related emotions: (a) focus (response either to the excellence of the person as a whole or excellence of his/her specific actions); (b) valence (positive or negative feelings); and (c) self-oblivion (the degree of absorption). This results showed almost the same dimensional space as a different study done on university students. Additional analyses were conducted according to age. The results revealed that the coordinates of the respect-related emotion words seen in adults ages 60–79 were a little different from those of the whole sample, as was seen in the previous findings of the hierarchical semantic structure of the same emotion words for the same adult sample. Finally, limitations of these approach for emotion words and future directions for studying respect-related emotions are discussed.

目　　次

1　問題と目的
　A　現代日本人の尊敬関連感情の階層的意味構造とその世代差
　B　感情の次元理論から見る尊敬関連感情
　C　本研究の目的の整理
2　方法
3　結果
　A　分析対象者全体における尊敬関連語の空間的布置
　B　尊敬関連語の空間的布置の世代差の検討
4　考察
　A　人物焦点尊敬・感情的態度
　B　行為焦点尊敬・感情状態
　C　本研究の限界と今後の課題

1　問題と目的

人は生まれてから生涯を通じて，日々，様々な感情を自らが経験し，あるいは他者の表出する様々な感情を知覚し理解しようとする。そして，その過程で形成し獲得した感情知識や感情概念を用いながら，日々接する感情的事象や，自身や他者の気持ちを「うれしい」，「かなしい」，といった特定の感情語でラベリングし，カテゴリー化し，感情知識・概念の認知的構造をさらに豊かに洗練し，発達させていく。これまで，人の主観的情感（subjective feeling）を表す感情語は，階層構造を持ってゆるやかにカテゴリー化されるという知見[1, 2]や，２次元ないしは３次元の空間に規則性を持って配列されるという知見[3, 4]，またこうした感情語の階層的意味構造や空間的布置には文化によって共通する部分も異なる部分も見られるという知見[2, 4]が数多く得られてきた。感情の次元理論（dimensional theory）において代表的な論者の一人であるRussellは，多次元尺度構成法（MDS）などの手法により感情語を空間的に布置する一連の分析結果に基づいて，あらゆる感情概念は快度（pleasantnessあるいはpleasure-displeasure）と覚醒度（arousal）の２次元の組合せで円環上に布置されるというモデル（circumplex model）が最も妥当であると主張した[3]。本研究は，日本人が経験しやすい感情であることが理論的・実証的に示されている一方で，そもそも感情概念ではないとされることもある尊敬（respect）や，敬愛，憧れ，畏怖，脱帽，といった尊敬に関わる言葉が，感情の次元理論からも捉えられる概念であるのかを検討するものである。

A　現代日本人の尊敬関連感情の階層的意味構造とその世代差

尊敬（respect）は日常生活においても，また学術的にも，様々な意味を持った言葉として使用される曖昧な概念である。たとえば，心理学において尊敬は，相手の人権や人格を認める冷静な対人的・道徳的義務として扱われることもある[5, 6]一方で，優れた性質を示す他者に対して主観的に感じられる一過性のポジティブ感情として扱われることもある[7, 8, 9, 10]。また，ある人物のことを好きであるとか嫌いであるとかと同じように，自身の模範となるような優れた他者に対する一貫した感情的態度（emotional attitude）[11]を指し示す言葉としても，尊敬は頻繁に用いられている。

こうした様々な文脈で使用される尊敬概念をめぐって，近年，尊敬やrespectといった言葉が表す典型的な意味が，文化や時代によって異なる可能性が指摘されている[12, 13, 14, 15]。Li & Fischer（2007）[12]は，respectには，誰もが享受に値する道徳的原理に基づく社会的・態度的概念としての義務尊敬（ought-respect）と呼べるものと，優れた他者を称賛し自身の役割モデルに据えるポジティブな自己意識的感情としての感情尊敬（affect-respect）と呼べるものの2種類があると仮定した。そして，個人の自律性や独立，権利を重視する欧米圏においては，感情尊敬よりも義務尊敬が経験されやすいのに対して，相互の調和やつながりを重視しつつも，生涯にわたる学習を通じて自身の完全性を主体的に高めていくこと（self-perfection）が理想とされる儒教の影響を受ける中国文化圏においては，義務尊敬よりも感情尊敬が強調されることが一般的で，経験されやすい感情であると仮定した。さらに，Li & Fischer（2007）[12]は，英語ではrespectの一語が文脈によって義務尊敬と感情尊敬のどちらも意味するのに対して，中国語では義務尊敬は「尊重（zunzhong）」，感情尊敬は「尊敬（zunjing）」という言葉に明確に区別されていると論じた。尊敬は中国人にとって重要な感情概念の一つであり，中国語にはzunjingに関わる多くの感情語が存在し，それらの多くは英語には簡単に翻訳できないニュアンスを持つという。

中国と同じ東アジアにあり，古来，儒教文化の影響を多少なりとも受ける日本人においても，尊重と尊敬の2語があり，また尊敬に関わる多くの感情語が存在する。尊敬は近年，正当な権威（authority）や社会階層の秩序を維持する機能を持った重要な道徳的感情としても理論化されている[16]。儒教文化においては特に，「長幼の序」という言葉に代表されるように，子どもは大人を敬い，大人は子どもを慈しむというあり方が社会規範とされてきた。現代の日本においても，礼儀作法として敬語が果たす役割は大きく，家庭でのしつけや学校教育を通して教えられるだけではなく，ビジネスマナーとしても十分に習得し，使いこなすことが求められている。中学校にでも入れば後輩は先輩を敬い，社会人になれば部下は上司を敬うのが一種義務のようなところとなっており，また義務というところを超えて，敬愛する先輩や教師，上司との間に濃密な上下関係が生まれたりもする。これまでも，いわゆる相互協調的自己観が優勢であるとされる日本人は，相互独立的自己観が優勢であるとされるアメリカ人に比べ，尊敬や親しみといった対人関与的感情（socially engaging emotions）を「よい気持ち（good feeling）」として経験しやすいことが理論的にも実証的にも示されてきた[17, 18, 19]。

ある文化圏において，特定の事象や事物の概念を示す言葉が数多く存在することは，それだけその概念が指し示すものの特徴がその文化圏の人にとっては多様で重要な意味を持ち，他の文化圏の人から見たら気づかないようなほんのわずかな差異が時には生存や適応を左右するものとしてきめ細やかにカテゴリー化され，人々に把捉されてきたことを物語る証拠であるとされている[20]。近年，日本人にとってのこうした「認知の精度がきわめて高い（hypercognized）」[20]感情概念の一つとして尊敬を仮定し，その概念構造を探る研究がなされている[14, 15]。尊敬に関わる感情を「尊敬関連感情」として捉えたこれらの研究では，曖昧な感情概念の階層的意味構造を探るプロトタイプ・アプローチ[1, 2]に依拠し，尊敬関連語の一対比較の意味的類似度評定データを階層的クラスター分析にかけることによって，それらの最も抽象的な上位レベルや，日常の会話や思考で主に使用される基本レベルのカテゴリーを明らかにしている。すなわち，大学生・大学院生[14]と20―70代の成人[15]をそれぞれ対象とし，同じ尊敬関連語18語を扱った研究でともに，尊敬関連感情はまず，優れた人物に対して一貫して保持される「人物焦点尊敬・感情的態度」と，優れた行為に対して一時的に生じる「行為焦点尊敬・感情状態」の大きく二つの上位カテゴリーに分かれた。また，その下位の基本カテゴリーとして，人物焦点尊敬・感情的態度には「敬愛」（敬愛，敬意，尊敬，敬慕，敬服という言葉が含まれた），「尊重」（尊重），「心酔」（心酔，崇拝，憧れ），「畏怖」（畏怖，畏敬）があり，行為焦点尊敬・感情状態には「感心」（感心，脱帽，感服，称賛），「驚嘆」

（驚嘆，感激，感嘆）があった。尊敬という言葉自体は，学生のサンプルでも，20―70代の成人全体のサンプルでも「敬愛」カテゴリーに含まれたことから，優れた人物を一貫して敬い慕うような穏やかな愛情に似た「敬愛」が，現代日本人における尊敬のプロトタイプ的情感（最も典型的な尊敬の気持ち）であることが示唆されている[15]。また成人を対象とした研究[15]では，尊重以外の尊敬を含めた尊敬関連語17語が他の恥や誇りといった感情語と比較しても，感情を表す言葉として十分に回答者に捉えられていたのに対し，尊重という言葉は感情を表す言葉としては捉えられていない傾向にあることも明らかにされている。これらの知見は，Li & Fischer（2007）[12]の中国人の知見と同じく，現代日本人においても尊重という言葉は典型的には感情ではない義務や態度を意味し，尊敬という言葉（またそれ以外に検討した尊敬関連語の一つ一つ）は感情の一例として捉えられていることを示す大きな証拠の一つであると考えられる。

さらに，成人を対象とした同一の研究[15]では，尊敬関連感情の階層的意味構造に世代間で差異が見られる可能性も示唆されている。すなわち，分析に使用された20―70代の同一の非類似度データに関して，探索的に20―30代，40―50代，60―70代の3世代ごとに同一の階層的クラスター分析を行った結果を比較すると，20―30代，40―50代では全体の結果と大きな差異が見られなかったのに対して，60―70代では特に人物焦点尊敬・感情的態度の基本カテゴリーにおいて差があることが示されている。具体的には，20―70代全体では基本レベルにおいて，畏怖と畏敬という言葉が「畏怖」という同一のカテゴリーをなしていたのに対して，60―70代では畏怖は単独で「畏怖」カテゴリーをなし，畏敬は尊重，尊敬，敬意，敬服とともに「尊重」カテゴリーをなしていた。さらに，60―70代では「敬愛」と「心酔」カテゴリーの境界が曖昧であり，敬愛，敬慕，憧れ，心酔，崇拝が「敬慕」という基本カテゴリーの一つをなしていた。この研究は2015年の2月に実施されており，これらの世代差に関しては，時代的（コホート的）観点と，発達的観点の双方から考察がなされている。すなわち，一つには，これまでタテの人間関係を重視すると一貫して考えられてきた[21]日本人において，決定的な要因は定かではないものの，たとえば現代のグローバル化や高度情報化の波や，従来確立していた年功序列や終身雇用制から徐々に転換しつつある柔軟な能力評価への移行，といった様々な影響を受けて，タテの関係性が弱まり，それに応じて尊敬や他の尊敬関連語に込める典型的な意味にも変化が起き始めてきている，という可能性である。もう一つには，成人になるにつれて，様々な能力や地位を獲得し，他者から尊敬（尊重）される機会が増えるために，尊敬と尊重が同義になるという可能性である。本研究では，先行研究と同一の20―70代成人の尊敬関連語18語の意味的類似度データ[15]に関して，階層的なカテゴリーとしての概念構造ではなく，空間的布置としての概念構造に焦点を当て，そこで抽出される次元にも世代差が見られるか否かを検討する。

B　感情の次元理論から見る尊敬関連感情

冒頭に述べたように，感情の認知的構造を探る場合には，階層的な意味構造を検討するほかにも，2次元ないしは3次元の空間において感情概念がどのように布置されるかを検討することも有力な手法であるとされてきた[3, 4, 22]。感情の次元理論では，色を波長と明度で並べるように，感情語を次元上に配列する[22]。Russellは，たとえば，悲しみはネガティブで覚醒度の低い感情であり，喜びはポジティブで覚醒度の高い感情である，といったように，全ての主観的情感は快度と覚醒度の2次元の組合せで説明できるとしている[3]。

もし尊敬関連語も感情概念として捉えられているのであれば，快度や覚醒度に相当する次元が見られると想定される。実際に，大学（院）生における尊敬関連語18語の階層的意味構造を検討した武藤（2014）[14]では，同一の意味的類似度データに非計量的MDSを適用した分析もなされ，この想定を支持する知見が得られている。この分析では，尊敬関連語18語の空間的布置として3次元解が採用されている。第1次元は，その感情語が優れた人物像全体と優れた特定行為のどちらに焦点が当たるか，ということを示す「焦点化対象」であり，階層的意味構造の人物焦点尊敬・感情的態度と行為焦点尊敬・感情状態の二つの上位カテゴリーに含まれる言葉が対称的に布置していた。第2次元は，感情価に相当する次元であり，感心，称賛，敬愛といったポジティブな主観的情感と，畏怖というネガティブな主観的情感が対極に布置した（なお，武藤（2014）[14]はこの次元を「誘発性」と名付けているが，その主観的情感がポジティブかネガティブかを表すvalenceの訳語であるため，本研究では，より一般的な訳語と思われる「感情価」を用いる）。第3次元は，心酔や感激という言葉と，尊重という言葉が対極に布置し，対象に強く心を引きつけられて全神経が集中し，我を忘れて没頭する程度が高いか低いかを表す

「忘我性」であった。この研究では，感情価に相当する次元が得られたことから，大学生は尊敬関連語を感情概念として捉えているとする一方で，階層的意味構造の上位レベルに対応した第１次元の焦点化対象と，第３次元の忘我性は尊敬関連感情に特有の次元である可能性を示唆している。

しかしながら，日本人の尊敬関連語の空間的布置は，学生以外のサンプルではこれまで検討されていないため，他の年齢層や職業層においても同様の３次元解として解釈可能であるかは定かではない。また，特に忘我性は，これまでの感情の次元理論における（生理的な活性・不活性の程度を示す）覚醒度とも大きく重なりを見せる曖昧な次元であると考えられ，尊敬関連感情の第３次元については再検討する必要があると思われる。尊敬は，道徳的義務（他者の「尊重」）として捉えられることもあり，本当に感情概念として捉えてよいのかがこれまで争点となってきた[8, 12, 13, 14, 15]。幅広い年齢や職業を対象に尊敬関連語の空間的布置を再検討することには，研究結果の再現性の観点のみならず，尊敬とは何かを考える上でも意義があると思われる。そこで，本研究では，尊敬関連感情の空間的布置に関して，対象者を幅広い成人サンプルに拡大しても，武藤（2014）[14] の知見が再現されるか否かを検討する。また，尊敬関連感情の階層的意味構造では一定の世代差が見出されていることから[15]，本研究では同様にその空間的布置の世代差も検討する。その際には，既に得られている階層的なカテゴリーの知見[14, 15]も踏まえて，分析や解釈を行うこととする。異なる統計的手法による知見を統合的に解釈することは，現代日本人にとって重要であると考えられる尊敬関連感情概念を整理する上で有効であると思われる。

C　本研究の目的の整理

本研究の目的は三つある。第一に，尊敬関連感情の空間的布置に関して，調査対象者を幅広い成人サンプルに拡大しても，武藤（2014）[14] の知見が再現されるか否かを検討する。第二に，尊敬関連感情の空間的布置の世代差を探索的に検討する。第三に，既に得られている階層的意味構造の知見[15] と，今回の空間的布置の結果を合わせ，尊敬関連感情が現代日本人にとってどのような性質を持った主観的情感であると言えるのか，暫定的な概念整理を試みる。本研究では，以上の目的を達成するために，武藤（印刷中）[15] が20―70代成人を対象に実施したインターネット調査と同一のデータを使用する。なお，このインターネット調査の妥当性と限界点については，武藤（印刷中）[15] を参照されたい。

2　方法

武藤（印刷中）[15] と同一のデータを分析対象とした。本研究において必要な情報のみ記述する。それ以外の調査内容や結果の詳細に関しては，武藤（印刷中）[15] を参照されたい。

回答者　2015年２月に，楽天リサーチ株式会社に調査の実施を委託した。配信条件は，年齢を20―79歳（モニター上限），性別を男女，配信地域を日本全国とし，男女比また年齢ができるだけ均等になるように回収を依頼した。回答者は，以上の条件に合致する登録モニターからランダムに選ばれ，1007名から回答を得た。このうち，武藤（印刷中）[15] と同じ基準で回答内容が妥当であるかが疑われた者を除外し，有効回答者を798名（男性377名，女性421名；平均年齢46.6歳（*SD*＝15.3，レンジ：20―79））とした。有効回答は日本全国から集まり，最終学歴は大学院（*n*＝50，有効回答者798名の6.3％），大学（*n*＝337，42.2％），短大・高専（*n*＝87，10.9％），専門学校（*n*＝101，12.7％），高等学校（*n*＝212，26.6％），中学校（*n*＝10，1.3％），その他（*n*＝1，0.1％）であった。職業は，会社員・役員（*n*＝295，37.0％），自営業（*n*＝63，7.9％），専門職（*n*＝23，2.9％），公務員（*n*＝31，3.9％），学生（*n*＝21，2.6％），専業主婦・主夫（*n*＝137，17.2％），パート・アルバイト・フリーター（*n*＝114，14.3％），無職・定年退職（*n*＝99，12.4％），その他（*n*＝15，1.9％）であった。

調査手続き　回答者は，個人のコンピュータ端末から調査画面にアクセスし，冒頭で調査内容や，研究協力の任意性と撤回の自由，また個人情報保護方針に関する説明に同意する場合のみ回答を行った。回答者には，謝礼として，同社グループの各サービスで利用可能な一定のポイントが同社の基準により付与された。調査は武藤（2014）[14] と同様に，「言葉の意味に関するアンケート」として実施し，言葉どうしの意味の類似性について，回答者自身がどう思うかを尋ねた。また，「回答の際は，意味のわからない言葉があっても，辞書やインターネットの検索機能等を使用して意味を調べて回答することはお控えください。」と教示した。最後に，自身に最もあてはまる最終学歴と現在の職業を選択式の質問で尋ねた。

尊敬関連語の一対比較　武藤（2014）[14] の尊敬関連語18語153対の一対比較をほぼ同じ手続きで実施した。「あなたは，以下の組になった言葉の意味が互いにどれくらい似ていると思いますか。」と尋ね，「全然似ていないと思う」（1点）から「とてもよく似ていると思う」（5点）の5件法で評定を求めた。回答者にとって意味のわからない言葉を含む組合せに関しては，「左の言葉の意味がわからない」，「右の言葉の意味がわからない」，「両方の言葉の意味がわからない」のうちあてはまるものを選ぶように教示した。同一画面で153対を一度に評定するのは回答者にとって負担となると考えられたため，評定は17対ずつ9セクションに分けて実施した。提示順序の影響を防ぐため，セクション提示順は回答者ごとに異なり，セクション内の17対の提示順も回答者ごとにランダム化した。

3　結果

以降の分析にはR 3.0.2を使用した。

A　分析対象者全体における尊敬関連語の空間的布置

先に得られている階層的意味構造の知見と対応させるため，武藤（印刷中）[15] と同様に，尊敬関連語18語に関して意味のわからない語がなく，類似性評定153項目全てに欠損のない515名（有効回答者の64.5％；男性255名，女性260名；平均年齢49.3歳（*SD*＝15.1，レンジ：21―79））を尊敬関連語の意味をよく理解する信頼の置けるサンプルとみなし，非計量的MDSの分析対象者とした。非類似度は153対それぞれの評定平均値を逆転し算出した。分析には武藤（2014）[14] と同じMassパッケージのisoMDS関数を使用し，ユークリッド距離を用いて検討した。作図にはscatterplot3dパッケージを用いた。

分析の結果，分析対象者全体（n＝515）では，武藤（2014）[14] の大学生を対象とした研究とほぼ同じ3次元の空間的布置が再現された。尊敬関連語を武藤（印刷中）[15] の階層的クラスター分析で得られた基本カテゴリーごとにグループ分けした図を図1に示す。また，図2には3次元解の第2次元と第3次元のみを示した散布図を示す。また各語の座標を表1に示す。第1次元は，武藤（2014，印刷中）[14, 15] の人物焦点尊敬・感情的態度の11語と行為焦点尊敬・感情状態の7語が対称的に位置したことから，人物と行為のどちらにより焦点が当たるか，という焦点化対象を表す軸であると考えられた。第2次元は，武藤（2014）[14] と同様に，感激や称賛，敬愛，感心などの言葉と，畏怖という言葉が対極に布置したため，その主観的情感がポジティブかネガティブかを示す感情価を表す軸であると考えられた。ただし，感激という言葉が称賛，敬愛，感心などよりもさらに端に布置したこと（図2）は，武藤（2014）[14] の大学生の結果において感激が称賛や感心よりも内側に布置した（より次元軸の中心近くにあった）こととは異なっていた。第3次元は，武藤（2014）[14] と同様に，尊重という言葉と心酔・感激という言葉が対極に布置したため，どの程度対象に没頭し，我を忘れた状態にあるか，という忘我性を表すと

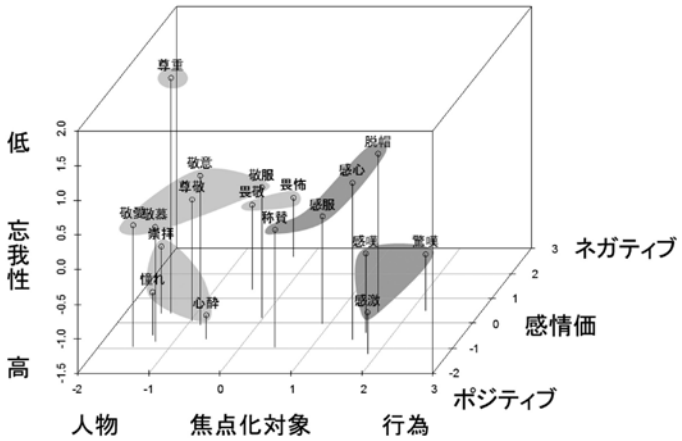

図1　分析対象者全体（n＝515）における尊敬関連語18語の空間的布置

注）同一データを対象にした階層的クラスター分析（武藤，印刷中）[15] で得られた基本カテゴリーごとにグループ分けした。

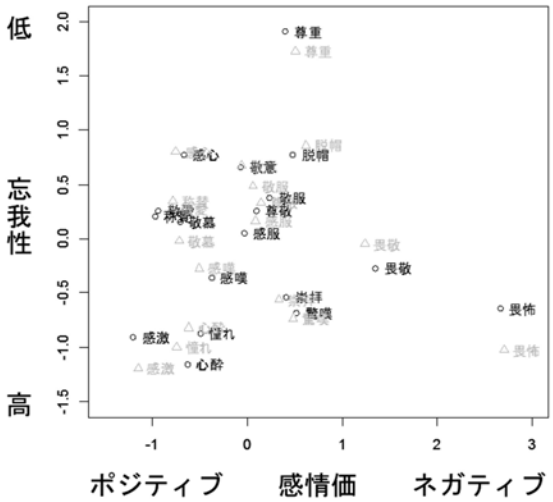

図２　尊敬関連語18語の感情価と忘我性

注）図１の感情価と忘我性の２次元のみの散布図。黒色の〇および尊敬関連語は分析対象者全体（n＝515）の座標を示し，灰色の△および尊敬関連語は60―70代（n＝137）の座標を示す。

表１　分析対象者全体また世代ごとの３次元解の座標

	全体（n = 515）				20―30代（n = 156）			40―50代（n = 222）			60―70代（n = 137）		
	P	焦点化対象	感情価	忘我性	焦点化対象	感情価	忘我性	焦点化対象	感情価	忘我性	焦点化対象	感情価	忘我性
敬愛													
敬愛	0.82	-1.52	-0.95	0.26	-1.48	0.82	0.21	-1.54	-1.00	0.51	-1.48	-0.80	0.28
敬意	0.78	-0.81	-0.07	0.66	-0.89	-0.07	0.78	-0.79	-0.11	0.68	-0.73	-0.06	0.67
尊敬	0.75	-0.97	0.09	0.26	-1.09	-0.07	0.40	-0.99	0.14	0.36	-0.98	0.14	0.33
敬慕	0.70	-1.26	-0.71	0.16	-1.22	0.72	0.18	-1.33	-0.64	-0.03	-1.24	-0.72	-0.02
敬服	0.36	-0.03	0.23	0.38	-0.17	-0.25	0.08	-0.07	0.16	0.47	-0.12	0.06	0.48
尊重													
尊重	—	-1.35	0.40	1.91	-1.48	-0.23	1.92	-1.35	0.57	1.94	-1.40	0.51	1.73
心酔													
心酔	0.78	-0.57	-0.63	-1.16	-0.68	0.73	-1.51	-0.61	-0.58	-1.21	-0.42	-0.62	-0.82
崇拝	0.71	-1.49	0.41	-0.54	-1.51	-0.29	-0.53	-1.47	0.41	-0.70	-1.29	0.33	-0.56
憧れ	0.62	-1.36	-0.50	-0.87	-1.26	0.66	-0.77	-1.41	-0.53	-0.73	-1.45	-0.75	-1.00
畏怖													
畏怖	0.55	-0.26	2.67	-0.65	-0.29	-2.42	-0.74	0.00	2.61	-0.68	0.00	2.71	-1.02
畏敬	0.19	-0.48	1.35	-0.27	-0.61	-1.57	-0.14	-0.44	1.31	-0.48	-0.56	1.24	-0.04
感心													
感心	0.68	1.50	-0.67	0.78	1.51	0.90	0.54	1.52	-0.70	0.79	1.45	-0.76	0.80
脱帽	0.65	1.53	0.48	0.77	1.72	-0.41	0.56	1.46	0.47	0.82	1.46	0.62	0.86
感服	0.55	0.90	-0.04	0.05	0.98	0.22	-0.04	0.97	-0.07	0.11	0.85	0.08	0.16
称賛	0.35	0.49	-0.98	0.21	0.64	0.91	0.73	0.36	-0.96	0.00	0.53	-0.79	0.35
驚嘆													
驚嘆	0.70	2.20	0.51	-0.68	2.28	-0.78	-0.39	2.23	0.61	-0.72	2.10	0.48	-0.73
感激	0.70	1.86	-1.21	-0.91	1.76	0.87	-1.14	1.88	-1.34	-0.78	1.69	-1.16	-1.19
感嘆	0.69	1.61	-0.38	-0.36	1.79	0.28	-0.14	1.59	-0.35	-0.36	1.59	-0.51	-0.27

注）分析対象者全体（n＝515）のＰは，武藤（印刷中）[15]の階層的意味構造の基本カテゴリー内におけるプロトタイプ性であり，そのカテゴリー内においてある語が他の語に比べてどのくらい中心的で典型的であるかを意味する相対的指標である。詳しい算出法は，武藤（印刷中）[15]を参照されたい。ここではこのプロトタイプ性が高い順に各語を並べた。また，20―30代の感情価は，値の正負の符号を逆にすれば，分析対象者全体また他の世代の結果とほぼ一致する。

考えられた。なお，Kruskal（1964）[23] のストレス値の減少具合（１次元解から順に，.34，.13，.07，.05，.03，……）からも，３次元解が推奨され，武藤（2014）[14] のストレス値の結果（.31，.14，.07，.05，.04，……）とほぼ同様の値であった[24]。このように，各次元で各語が布置される順番には武藤（2014）[14] と微妙な差異が見られたものの，全体として尊敬関連語の空間的布置および抽出された次元はほぼ再現された。

B　尊敬関連語の空間的布置の世代差の検討

尊敬関連語の空間的布置の世代差を検討するために，武藤（印刷中）[15] と同様に，探索的に20年を一世代と仮定して分析した。分析対象者を20―30代156名（男性83名，女性73名；20―30代有効回答者298名の52.3％），40―50代222名（男性106名，女性116名；有効回答者323名の68.7％），60―70代137名（男性66名，女性71名；有効回答者177名の77.4％）に分け，３世代別に同様の非計量的MDSで検討した。その結果，ストレス値の減少具合（20―30代で１次元解から順に，.33，.13，.08，.05，.04，……；40―50代で.34，.13，.07，.05，.05，……；60―70代で.30，.13，.07，.05，.04，……）は，全体の結果とほとんど変わらず，解釈可能性からも３次元解が妥当であると考えられた。全体また各世代における各次元上の各語の座標（表１）では，20―30代のみ，第２次元が全体や他の世代の結果と異なるように見えるが，正負の符号を逆転すると他の結果とほぼ一致することがわかる。よって，このことはおそらく座標の算出上の何らかの問題であり，感心，感激，敬愛といった言葉と畏怖という言葉が対極にあることからも，20―30代においても他の世代と同様に，第２次元が感情価を表す軸であることに変わりはないと解釈できる。

同一のデータを対象にした階層的クラスター分析（武藤，印刷中）[15] では，20―70代全体の結果と60―70代のみの結果に基本レベルで差異が見られたため，図２には60―70代の感情価と忘我性の布置も示した（焦点化対象次元においてはほとんど差異が見られなかったため図示は省略する）。図２を見ると，全体的な布置や各次元で対極にある語にはほぼ差異が見られないものの，60―70代の畏敬と畏怖の２語の距離が，全体の畏敬と畏怖の２語の距離よりもわずかに離れていることが確認できる。また，60―70代では，畏敬は尊敬，尊重，敬意により近いこともわかる。よって，60―70代の階層的クラスター分析において畏敬が尊敬，尊重，敬意，敬服とともに「尊重」カテゴリーをなした[15] のは，畏敬という言葉が感情価と忘我性の次元において，畏怖という言葉よりも，これら（60―70代における）他の「尊重」カテゴリーの言葉に類似していると判断されたからである可能性がある。さらに，60―70代では全体の結果と比べて，心酔と敬慕の２語がより近い位置にまとまっていることもわかる。このことは，60―70代では「敬愛」と「心酔」カテゴリーの境界が曖昧であり，敬愛，敬慕，憧れ，心酔，崇拝が「敬慕」という基本カテゴリーをなしていたこと[15] に合致する。このように，60―70代では特に感情価や忘我性の次元における尊敬関連語の空間的布置が他の世代と比べて異なる可能性が示唆された。

４　考察

本研究では，尊敬関連感情の空間的布置に関して，対象者を幅広い成人サンプルに拡大して再検討した。また，その世代差を探索的に検討した。その結果，分析対象者全体では，武藤（2014）[14] の知見と同様に，焦点化対象，感情価，忘我性として解釈できる３次元と，各尊敬関連語の空間的布置がほぼ再現された。また，探索的に個別に検討した３世代いずれにおいても，同様の３次元解として解釈するのが妥当と言え，焦点化対象，感情価，忘我性は現代日本人の尊敬関連感情において安定して得られる次元である可能性が示唆された。研究結果の再現性の観点から，これらの知見は意義深いと考えられる。ただし，60―70代においては，同一データの階層的意味構造の世代差の知見[15] に合致し，特に感情価や忘我性の次元において，一部の尊敬関連語の布置が微妙に異なる可能性も示唆された。ここでは，本研究の第三の目的であった，既に得られている階層的意味構造の知見と今回の空間的布置の結果を合わせ，尊敬関連感情が現代日本人にとってどのような性質を持った主観的情感であると言えるのか，暫定的な概念整理を試みる。

A　人物焦点尊敬・感情的態度

「敬愛」「敬愛」カテゴリーは，大学生を対象とした階層的クラスター分析[14] でも，20―70代成人全体を対象とした同様の分析[15] でも，尊敬という言葉そのものを含んだことから，現代日本人における尊敬のプロトタイプ的情感として考察されている。敬愛や敬慕などが含まれるこのカテゴリーは，大学生の知見と同じく，本分析においても感情価がポジティブで，忘我性が中程度の感情概念として捉えられていた（図１・

２）。よって，「敬愛」は，武藤（2014）[14] の考察と同様に，現代の日本人にとって，自分よりも優れた特定人物を一貫して敬い慕うような，ポジティブで比較的穏やかな主観的情感であると考えられる。

「尊重」　他の尊敬関連語と比べて，尊重という言葉の忘我性が著しく低いこと（図１・２）も，武藤（2014）[14] の知見と合致した。このことは，武藤（2014）[14] の考察通り，「尊重」が生理的な興奮をほとんど伴わない概念であり，感情概念というよりも，理性的な概念であることを示唆する。すなわち，Li & Fischer（2007）[12] の中国の知見と同様に，現代の日本では，大学生に留まらず，他の年齢層・職業層においても，尊重は義務尊敬を意味する概念として捉えられている可能性が示唆された。ただし，武藤（印刷中）[15] の階層的意味構造の知見では，60―70代の分析対象者において，尊敬は畏敬，尊重などとともに「尊重」カテゴリーをなしたことも明らかにされており，本研究の知見も，現代という時代や，感情の概念化の発達的変化を大いに反映している可能性がある。

「心酔」「心酔」カテゴリーの言葉が，「敬愛」カテゴリーの言葉に比べ，忘我性が高いという特徴を持つこと（図１・２）も，武藤（2014）[14] の知見を再現する結果である。武藤（2014）[14] は，心酔，崇拝，憧れの３語を含んだ「心酔」は，優れた特定他者に夢中になる熱烈な尊敬感情を意味すると考察した。本研究でもそれに合致する知見が得られたと考えられる。ただし，60―70代における階層的意味構造においては，「敬愛」との境界が曖昧であり，本分析の空間的布置でも心酔と敬慕という言葉がより近い位置にあったことには，「尊重」や次に述べる「畏怖」と同じく注意する必要があるだろう。

「畏怖」「畏怖」は，日本人大学生においては典型的にはネガティブな感情価を持つ主観的情感であり，対象の偉大な性質に圧倒され，近寄り難さや脅威性，恐怖のニュアンスを伴うと考察されている[14]。本研究でもその知見を再現する結果が得られた。すなわち，全世代を通じて，畏怖と畏敬の２語は他の尊敬関連語と比べてネガティブな感情価を持つ主観的情感として捉えられており，世代差はほとんど確認できなかった。欧米圏の研究では，近年，畏怖や畏敬に対応すると思われるaweは，脅威や恐怖を伴うこともあるものの[12, 25]，典型的には大自然を見て感動するようなポジティブ感情として検討されることが主流となりつつあり[26, 27, 28]，本研究の結果は「畏怖」（awe）概念の文化差を示す知見の一つである可能性がある。一方で，忘我性に関しては，60―70代では全体の結果に比べて，畏敬という言葉の忘我性がわずかに低く，畏怖の忘我性がわずかに高く，それに応じて２語がより離れた位置にあることが見て取れる（図２）。同一データを対象にした階層的意味構造の知見[15] では，60―70代では畏怖と畏敬の２語は同一の「畏怖」カテゴリーをなさなかったことも踏まえると，高齢層の人々は，畏怖と畏敬という言葉を，下の世代に比べて明確に区別して使用している可能性がある。この理由は定かではないものの，同一データを対象にした武藤（印刷中）[15] の考察と同じく，以前には，畏敬という言葉が人に対しても頻繁に用いられていたことが，一つの要因として考えられるのかもしれない。あるいは，まだ科学が十分に発展していない時代においては，未知の脅威的事象は説明できないことも多く，様々な自然現象が科学的に解明されつつある現代に生まれた大学生や成人に比べて，上の世代の高齢者は子どもの頃に，人間が侵すことのできない得体の知れない事象に数多く接し，我を忘れるほどの畏怖の念を頻繁に感じてきたのかもしれない。そうした感情経験の世代差が，感情の概念化にも影響をもたらしている可能性がある。

B　行為焦点尊敬・感情状態

「感心」「感心」には感心，脱帽，感服，称賛の４語が含まれ，人物焦点尊敬の言葉と比べて，どれも一過性のニュアンスがある。武藤（2014）[14] は，この結果を受けて，「感心」は「状態尊敬」であると示唆した。本研究でも「感心」カテゴリーの語は「驚嘆」カテゴリーの語と同じく焦点化対象次元において「敬愛」や「心酔」カテゴリーの語と対称的に布置したため，合致する知見が得られたと言える。さらに，このように焦点化対象において大きな違いがある「感心」と「敬愛」が，感情価と忘我性の次元においてほぼ同様に布置していること（図２）も，武藤（2014）[14] を再現する結果であった。よって，「感心」は，「心酔」や「畏怖」よりも，「敬愛」に似た主観的情感である可能性がある。

「驚嘆」「驚嘆」は「心酔」と同じく，相対的に忘我性の高い感情概念であることが見て取れる（図２）。このことは武藤（2014）[14] の知見とも合致し，「驚嘆」は優れた他者の行為や自然の事象に対して驚き興奮する一過性の感情状態であると考えられる。ただし，本研究においては，武藤（2014）[14] の大学生の結果とは異なり，感激という言葉が称賛，敬愛，感心などよりもさらに端に布置され，より感情価がポジティブな主観的情感として捉えられている可能性が示唆された。

その理由は定かではないものの，たとえば大学生よりも上の世代は，何か良い出来事や素晴らしい出来事の起こったときのポジティブな感情経験を表す言葉として，感激を頻繁に用いているのかもしれない。あるいはその逆に，現代の大学生や若者は，そうした非常にポジティブな状況下において，感激という言葉を典型的には用いなくなってきているのかもしれない。

C　本研究の限界と今後の課題

本研究は，武藤（2014）[14] の尊敬関連語の空間的布置の知見が，階層的意味構造の知見と同じく，大学（院）生に特異的なものではなく，多少の世代差はありつつも，現代日本の成人にもある程度一般化可能なことを示した点で意義深いと言える。感情価や忘我性の次元は，これまでの感情の次元理論における快度や覚醒度とかなり近似する次元であると解釈できるため，現代日本人は，尊敬に関わる言葉の多くを感情概念として捉えていることが示唆されたと言えよう。

本研究の限界を二つ挙げる。第一に，Russellに代表される感情の次元理論の根本的な問題として，この理論的枠組みでは，認知的評価や行為傾向，生理的変化，運動・表出，主観的情感といった，様々な感情の構成要素のうち，主観的情感の側面しか検討できないという点が挙げられる[4,22,29]。たとえば，怒り（anger）と怖れ（fear）は，次元理論においては，どちらも感情価がネガティブで覚醒度が高い主観的情感として近い位置に配列されるが，当然のことながら，その認知的側面や行動的側面は大きく異なる[22]。これは，特にRussell以降の感情の次元理論が，Ekmanに代表される基本感情理論[11] に根本から異を唱える理論であることに由来すると考えられる。すなわち，基本感情理論では，感情の構成要素全てがいわば一つのセットとなり，人類に普遍的な自然類（natural kinds）として進化の過程で生体内に組み込まれ，必要が差し迫ったときに全構成要素が同時に発動すると仮定する[11,22,29,30]。一方で，次元理論では，そもそも感情概念は社会・文化に大きく規定される（つまり，感情は人工類（human kinds）である）ため，感情の構成要素は全てが常に生じるとは限らない，という立場をとるために，特に主観的情感を感情の主要な側面であるとする[4,22,29,30]。そして，基本感情と想定されてきた「悲しみ」や「怒り」といったカテゴリーが，もっと抽象的な次元空間における点に過ぎず，その文化圏に暮らす人々が実体として「ある」と思い込んだものでしかないと主張する[4,22,29,30]。そのため，本研究はそもそも尊敬関連感情の一側面を検討したに過ぎない。なお，同じく主観的情感に焦点を当てているという点では，特定の文化圏における感情知識や感情概念の階層的意味構造を検討するプロトタイプ・アプローチ[1,2,14,15]でも同様の問題が指摘できる。したがって，今後は，尊敬関連感情の主観的情感側面だけではなく，「敬愛」・「心酔」・「畏怖」・「感心」・「驚嘆」といった感情語で日本人がラベリングしカテゴリー化・概念化している感情が，実際にどのような行為傾向や認知的評価，生理的変化の側面と結びついているのか，その詳細な検討が必要であると言える。なお，行為傾向に関しては，大学生に自身の過去の尊敬関連感情エピソードを想起させ，その状況での当時の行為傾向を検討した研究[31] において，優れた他者に接して感じられた尊敬関連感情が「自分を成長させたい」，「自分に足りないところを自覚したい」といった自己是正的・向上的振舞いを強く動機づける可能性が示唆されている。さらに，この研究では，「敬愛」・「心酔」・「畏怖」・「感心」・「驚嘆」の５種類の尊敬関連感情は，共通する行為傾向レパートリーを有しながらも，その動機づけの強弱に差異があることも示されている。このように，尊敬は，私たち日本人にとって馴染み深く経験されやすいだけではなく，Li & Fischer（2007）[12] が理論的に主張したように，自己の発達や成長をもたらす重要な感情である可能性が実証的にも明らかになりつつある。こうした尊敬関連感情の主観的情感側面以外の知見を，様々な年齢層・職業層において検討を積み重ねることが，今後の大きな課題の一つと言えよう。

第二の限界として，武藤（印刷中）[15] も本研究も大学生の知見[14] の再現性の検討を優先したため，一部の尊敬関連語しか対象にできなかったことが挙げられる。武藤（2014）[14] は元々，第一次尊敬関連語リストとして類語辞典から36語をリストアップし，その中から日常的に重要であり意味的類似性の重なりが少ないと考えられる名詞18語に絞って検討を行っている。よって，より多くの尊敬関連語を対象とした場合に今回と同様の３次元が抽出されるかは定かではないところがある。しかし，方法論的にも，あまりにも多くの感情語の一対比較評定を求めると回答者の負担となるとも考えられるため，今後は，回答者にとって負担のない方法を模索しつつ，本研究の結果が他の尊敬関連語の認知的な空間的布置においても再現されるかを確かめる余地がある。たとえば，これまでボトムアップに得られた焦点化対象や感情価，忘我性の各次元を，研究者が操作的に定義し，尊敬関連語一語一語に対し

て，各次元に関する評定を回答者に直接求め，本研究の結果と比較しその次元軸の妥当性を評価する，といった方法が有効かもしれない。特に忘我性がこれまでの感情の次元理論における覚醒度とどのような関係にあるのか，単に覚醒度を反映したものに過ぎないのかは，本研究でも明らかにできなかった。忘我性の次元は，尊重の対極に布置する心酔や感激，憧れ，畏怖，驚嘆，といった言葉の意味を踏まえると，ベクトルの方向は覚醒度次元とかなり近いものであると考えられる。しかし，今回検討した18語の尊敬関連語だけではなく，様々な感情語と同時に検討してもなお忘我性と解釈できる次元が抽出されるのであれば，忘我性は尊敬関連感情にとって覚醒度とは異なる重要な意味を持つ次元であることがより説得的に主張できるかもしれない。今後は，現代日本における尊敬関連感情について，他の様々な感情との関連も含め，さらに精緻に検討していくことが望まれる。

注・引用文献

1）Shaver, P. R., Schwartz, J., Kirson, D., & O'Connor, C. 1987. "Emotion knowledge: Further exploration of a prototype approach." *Journal of Personality and Social Psychology*, 52: 1061–1086.

2）Shaver, P. R., Wu, S., & Schwartz, J. C. 1992. "Cross-cultural similarities and differences in emotion and its representation: A prototype approach." In M. S. Clark (Ed.), *Emotion (Review of personality and social psychology,* Vol. 13, pp. 175–212). Newbury Park, CA: Sage.

3）Russell, J. A. 1980. "A circumplex model of affect." *Journal of Personality and Social Psychology*, 39: 1161–1178.

4）Russell, J. A. 2003. "Core affect and the psychological construction of emotion." *Psychological Review*, 110: 145–172.

5）Janoff-Bulman, R., & Werther, A. 2008. "The social psychology of respect: Implications for delegitimization and reconciliation." In A. Nadler, T. E. Malloy, & J. D. Fisher (Eds.), *The social psychology of intergroup reconciliation* (pp. 145–170). New York, US: Oxford University Press.

6）Mayseless, O., & Scharf, M. 2011. "Respecting others and being respected can reduce aggression in parent–child relations and in schools." In P. R. Shaver & M. Mikulincer (Eds.), *Human aggression and violence: Causes, manifestations, and consequences* (pp. 277–294). Washington, DC, US: American Psychological Association.

7）Haidt, J. 2003. "The moral emotions." In R. J. Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences* (pp. 852–870). Oxford, UK: Oxford University Press.

8）蔵永瞳・樋口匡貴 2014.「尊敬の心理学的特徴に関する分析」『感情心理学研究』 第21巻, 第３号，pp. 133–142.

9）Ortony, A., Clore, G. L., & Collins, A. *The cognitive structure of emotions*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1988.

10）de Rivera, J., & Grinkis, C. 1986. "Emotions as social relationships." *Motivation and Emotion*, 10: 351–369.

11）Ekman, P. 1992. "An argument for basic emotions." *Cognition and Emotion*, 6: 169–200.

12）Li, J., & Fischer, K. W. 2007. "Respect as a positive self-conscious emotion in European Americans and Chinese." In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research* (pp. 224–242). New York: Guilford Press.

13）武藤世良 2013.「尊敬の教育的機能を探る―『自己ピグマリオン過程』の実証に向けて―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, pp. 393–401.

14）武藤世良 2014.「尊敬関連感情概念の構造―日本人大学生の場合―」『心理学研究』第85巻, 第２号, pp. 157–167.

15）武藤世良 印刷中.「現代日本人における尊敬関連感情の階層的意味構造」『心理学研究』

16）Haidt, J. *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon Books, 2012. (ハイト，J. 高橋洋(訳)『社会はなぜ左と右にわかれるのか―対立を超えるための道徳心理学―』紀伊國屋書店, 2014.)

17）Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991. "Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation." *Psychological Review*, 98: 224–253.

18）Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. 2000. "Culture, emotion, and well-being: Good feelings in Japan and the United States." *Cognition and Emotion*, 14: 93–124.

19）Kitayama, S., Mesquita, B., & Karasawa, M. 2006. "Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States." *Journal of Personality and Social Psychology*, 91: 890–903.

20）Levy, R. I. 1984. Emotion, knowing, and culture. In R. Shweder & R. Levine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self, and emotion* (pp. 214–237). Cambridge, UK: Cambridge University Press.

21）中根千枝 『タテ社会の人間関係―単一社会の理論―』 講談社現代新書, 1967.

22）Shiota, M. N., & Kalat, J. W. *Emotion*. (2nd ed., International ed.) Belmont, CA: Wadsworth, 2011.

23）Kruskal, J. B. 1964. "Multidimensional scaling by optimizing goodness of fit to a nonmetric hypothesis." *Psychometrika*, 29: 1–27.

24）なお，Kruskal（1964）[23] のストレス値による当てはまりの評価では，.20が不十分（poor），.10が可（fair），.05が良（good），.025が優（excellent），.00が完璧（perfect）とされている。

25）Keltner, D., & Haidt, J. 2003. "Approaching awe, a moral, spiritual, and aesthetic emotion." *Cognition and Emotion*, 17: 297–314.

26）Keltner, D. *Born to be good: The science of a meaningful life*. New York: W. W. Norton & Company, 2009.

27）Shiota, M. N., Keltner, D., & Mossman, A. 2007. "The nature of awe: Elicitors, appraisals, and effects on self-concept." *Cognition and Emotion*, 21: 944–963.

28）Shiota, M. N., Neufeld, S. L., Yeung, W. H., Moser, S. E., & Perea, E. F. 2011. "Feeling good: Autonomic nervous system responding in five positive emotions." *Emotion*, 11: 1368–1378.

29）遠藤利彦『「情の理」論―情動の合理性をめぐる心理学的考究―』 東京大学出版会, 2013.

30）Barrett, L. F. 2006. "Are emotions natural kinds?" *Perspectives on*

Psychological Science, 1: 28–58.
31）武藤世良 印刷中.「尊敬関連感情の行為傾向―大学生の感情エピソードに着目した検討―」『心理学研究』

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号13J09637）の助成を受けた。調査の実施にあたり，東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会の承認を受けた。本研究結果の一部は日本心理学会第79回大会（2015）において発表された。本研究にご協力くださった多くの回答者の皆様に心より御礼申し上げる。

（指導教員　遠藤利彦教授）